經濟研究

第6巻 第3號

July 1955 *Vol. 6 No. 3*

『剩餘價値學說史』における Marx の意圖に就いて

末永茂喜

I

私は嘗って次のような事を書いたことがある。すなわち Marxの『剩餘價値學說史』という著書は Smith, Ricardo その他の學者の學說に對する Marx の批判をまとめたものであるが，そこで批判されているのは Smith, Ricardo 等の學說の全體ではない。少くとも『資本論』全3巻で取扱われている問題と範圍を同じくするものではなく，それよりもはるかに範圍の狹いものである。從って『剩餘價値學說史』は，『資本論』第1巻第1版の序文その他に語られており，Marx の經濟學史を收めるという『資本論』の第4巻ではなく，むしろ『經濟學批判』における商品の分析に關する學說史や貨幣の尺度單位，流通手段および貨幣に關する學說史と並ぶ「剩餘價値」に關する學說史である。このことは，原稿成立の際の事情からも，また『剩餘價値學說史』における Marx の叙述方法や片言隻語からも推定することができるのであるが，このことを考慮しておかないと，『剩餘價値學說史』という著述は理解できなくなる，と。

私は，未だにこの解釋を棄て兼ねているものであって，ここではそのような Marx の片言隻語を拾い集めて見よう思う。つまり『剩餘價値學說史』に取扱われている Smith, Ricardo 等の學說に限度があり，それは『資本論』全3巻よりも範圍が狹いものであるということを示す Marx の言葉である。

この『剩餘價値學說史』の限界如何という問題は，ある意味からいえば，勿論，結局は論理的に解決を出して，その上で Marx のやり方が正しいかどうかを批判するよりほかに，解決の途はないかと思われるが，ここではそのような解決の途を辿ってみようとするのではない。ただ Marx がこれを書く際にどのような意圖を持っていたかを探って見るだけである。Marx の意圖を探るといっても，しかしこれらの言葉は折にふれて書かれたと言った斷片的なもので，意味の捕え難いものが多い。したがってこれに對する私の解釋を聞いていただいて，讀者の御示教を仰ぎたいと思うのである。

II

『剩餘價値學說史』という Marx の遺著の土臺となった『剩餘價値に關する諸學說』という原稿においては，Kautsky の傳えるところに據れば James Steuart の叙述から前後脈絡のある叙述が

始まっているということであるが（『剰餘價値學說史』改造社版マルクス＝エンゲルス全集第8巻53頁——譯文は大體においてこの全集版のものを拜借したが，都合によって時に私が改めた場合もある。お許しを乞いたい），その James Steuart から重農學派の經濟學者たちを通って Adam Smith の剰餘價値の發生に關する學說の紹介と批判に入ったときに，Marx は次のように記している。

——Adam Smith は，剰餘價値というものをば，實質的には別として，言葉の上では，一定の，その特殊なる形態から區別されたる範疇の形で展開していない爲に，彼は，それを，後ではすぐに利潤のさらに發展せる形態と直接に混同している。この誤謬は，Ricardo およびそのすべての後繼者に於いても殘存している。この事から（特に Ricardo においては，價値の根本法則がもつと體系的統一と徹底さとに於いて貫徹されており，從ってまた不徹底さと矛盾もよりはっきりと現われているが故に，もっと明らかに）一連の不徹底さ，未解決の矛盾，無思慮が成立する。これを Ricardo 主義者は（我々が後で利潤の篇で見るであろうように）小理屈的に言い廻して解決しようと企てている（8巻176頁）。

Marx 以前の經濟學者は，周知のように，Smith や Ricardo を含め，そのほとんど總べてが剰餘價値を利潤や地代，特に利潤から區別して考察するということをしなかった。そしてこのことから，Marx も言っているように一連の不徹底さ等が生じたのであった。この混亂の研究から，剰餘價値は利潤等から區別して考察すべきであるという結論を引き出し，事實，獨自の範疇としての剰餘價値を精密に分析して，それによって一連の不徹底さ等を一擧に解決したのは Marx であって，これは周知のごとく Marx の得意とするところであった。ここではそのことを述べているものである。この個所にも，考えてみれば解釋に迷わざるを得ない點もないわけではないが，しかし Marx が

1. 利潤に關する特別な1篇を設けるつもりであったこと

2. それは Smith の剰餘價値論に關するこの個所よりも後であること

3. そこでは利潤と剰餘價値との混同と，それに由來する混亂が取扱われるはずであったこと

これだけは明白である。

同じ利潤に關する問題でも，Marx が若干取扱いを異にするつもりであったらしいものもある。

Smith には，產業資本家が生產した商品を販賣するに當っては，原料の價格および勞働者の賃銀を回收するだけでは十分でない，「この冒險に敢て資本を投ずるこの事業の企業家」にもその利潤として何物かが與えられなければならない，と言っている個所があるが，Marx はこれを引用して言う。

——この賭事には後で言及すべきである。ずっと後の方，利潤の辯護論的叙述に關する章を見よ（8巻163頁）。

この個所にも疑問の點がないわけではないが，とにかく Marx が，利潤の辯護論的叙述に關する章を設けるつもりであったこと，その章は Smith に關するこの部分よりもずっと後であること，およびそこでは資本の投下を賭事であると解し，それから資本家の取得する利潤を說明しようとする學說が取扱われるはずであったこと——これらのことは明白である。

利潤に關するこれらの言葉と同じような言葉は，他にもいくつか見出すことができる。

『利潤に關する篇』については，George Ramsay が *An Essay on the Distribution of Wealth*（1836年發行）において利潤の率について述べていることは，後に利潤に關する篇において考察すべきであるという言葉などがある（8巻200頁）。

また利潤の辯護論的說明については，別に，特にそのために設けられた章で言及するとは言っていないが，「後に」あるいは「後で他のある章において」言及すると言っているものがある。たとえば資本家が取得する利潤は，時に，彼がなすところの監督および指揮の勞働という特殊な勞働に對する賃銀の別名に過ぎないと考えられることがあり，Smith はこのような利潤觀に反對していたが，この辯護論的な見解については「後で他のある章において」言及するつもりであると言っている場

合（8 巻166頁），また Lauderdale は，*An Inquiry into the Nature and Origin of public Wealth*（1804 年公刊）において，資本というものが存在しなければ，人間はその力を藉りることなしに必要とする物を生産しなければならないか，あるいは全く生産しえなくなるわけであって，資本はこの不便を救濟するものであるから，それに對して報酬を受けるべきであり，その報酬が利潤であるとしていたが，このような Lauderdale がやっているところの利潤の辯護論的基礎付けは，後になって研究さるべきであると言っている場合（8 巻 376 頁）などが，それである。なお，匿名で出版された *An Inquiry into those Principles respecting the Nature of Demand and Necessity of Consumption, lately advocated by Mr. Malthus etc.*（1821 年出版）という著書には，不生産的消費者一般および特に土地所有者に對する Malthus の辯護に對し，資本家的立場からする攻撃がなされており，この攻撃は，そのまま勞働者の立場からする資本家攻撃としても妥當するものであるが，Marx は，これについては後に「資本と賃勞働との間の關係の辯護論的叙述に關する篇」において證明すると言っていることもある（11 巻 76 頁）。

また『剰餘價値學說史』第 2 巻の Ricardo の項に入ると，次のような言葉がある。

——Ricardo を批判するに當っては，我々は，Ricardo 自身は區別していなかったけれども，二つのものを區別しなければならない。第一は彼の剰餘價値の理論……であり，第二は彼の利潤の理論である。我々は，後者から始めよう。尤もこれは本來はこの篇ではなくして，第 3 篇の歴史的附錄に屬することであるが（9 巻 23 頁）。

この言葉も Ricardo における剰餘價値と利潤との混同について述べた言葉であるが，この個所から，Marx が第 3 篇なるものとそれに對する歴史的附錄とを豫定していたこと，そしてそれが何處に置かれるはずであったかは明らかでないが，この個所よりも後の方であること，およびそこで Ricardo の利潤に關する理論が考察されるはずであること——これらのことは明らかである。

以上に紹介した Marx の言葉を要約すると次のような形になる。

1. Marx は利潤に關する特別な篇を設けるつもりであった。そしてそこでは剰餘價値と利潤との混同およびそれに由來する混亂や，Ramsay の利潤率に關する理論やが考察されるはずであったが，それは Smith の剰餘價値論に關する項よりも後の方となるはずであった。

2. Ricardo の剰餘價値の理論はここで取扱うが，利潤の理論は，根本的には後に，第 3 篇なるものの歴史的附錄で取扱うつもりであった。

3. Marx はまた利潤の辯護論的叙述に關する章なるものを豫定していた。そしてそれは Smith の項よりもずっと後であって，そこでは，資本の投下に伴う危險から利潤を說明しようとする企てが分析されるはずであった。また利潤を監督および指揮の勞働に對する賃銀であるとする見解や，Lauderdale の利潤觀も，やはり辯護論的見解であって，これらも後に考察されることになっていたのであった。

III

しかしもしも利潤形態が捨象され，後の方の個所へ讓られているとすると，すぐに想い起されるのは，商品は一體如何なる價格をもって販賣されると假定されているか，それは生産價格をもってではなしに，價値あるいはこれに照應する價格をもって販賣されると假定されているのではないか，ということであるが，事實，Marx はその通りの假定を設けており，『剰餘價値學說史』全體を通して，價値と生産價格との區別が問題となるかぎり，いつも商品はその價値をもって販賣されると假定しているのである。そればかりでなく，Marx の言葉自身にも，彼のこのような意圖を表明したものがいくつかある。たとえば，Smith 批判の項に「價格と價値の兩者はここではまだ同一物であると考えておく」，商品の平均價格がその價値から區別されるということは「後で立證されるであろう」と言い（8 巻 186 頁および同 184 頁），また Ricado 批判の項に「商品はその價値で賣られると假定されている」と言っている（10 巻 271 頁

および281頁）ものなどがそれである。

この假定は，反面において，利潤形態が捨象されていることを物語るものである。

しかし，利潤形態の分析やそれに關するSmith, Ricardoその他の人たちの學說の批判やが，このように後の部分に讓られているということは，何を意味するだろうか。

この疑問を解決するには，Marxが彼の經濟學の體系をどのようなものにしようとしていたかを見なければならない。Marxは，周知のように，彼の經濟學の體系を次のように考えていたのであった。

1. 資本制生產の全體は，資本，土地所有，賃銀勞働，國家，外國貿易，世界市場の系列に從って觀察する。

2. 第1篇の資本の項は，資本一般，競爭，信用，株式資本の4部に分ける。

4. さらに資本一般の項は，資本の生產過程，資本の流通過程および總生產過程の諸形態の3部に分けられ，その後に經濟學史をおさめた第4部が附される。なお第1部の生產過程および第3部の總生產過程の諸形態については，『剩餘價値學說史』第3卷に對するKautskyの序文中に，Marxがこの原稿を執筆していた際に考えた構成の腹案が載っている（11卷10—12頁）。

このようなMarxが考えていた經濟學の體系の腹案を考慮して，先に紹介したMarxの言葉を讀むと，大體において次のような結論を下してよいように思われる。

1. 『剩餘價値學說史』において批判されているものは，Smith, Ricardo等々の學說の全體ではない。少くとも資本論全3卷において取扱われている問題に關する學說よりも，はるかに範圍の狹いものである。

2. 從って『剩餘價値學說史』は，Marxが資本論の後に附し，彼の經濟學史を叙述すると述べている，かの第4部ではない。それよりも理論的展開のもっと抽象的な段階に對する『歷史的附錄』である。

3. 利潤形態や價値の生產價格への轉化の問題などの分析が，Marxが第3部と呼んでいる，これよりもずっと後の方の部分に讓られることになっているのは，これに因るものである。またRicardoの利潤論の分析や利潤の種々なる辯護論的說明が後に讓られているのも同樣である。

もっともこのような結論を下すに當っても，なお考えてみなければならぬ事項がないわけではないが，しかし以上のことだけは言ってよいと思われるのである。

ここに記したような體系の腹案をMarxが最後まで維持したかどうか。このことについては，周知のように疑問が持たれている。しかし『剩餘價値學說史』の原稿をMarxが書いたのは1861年8月から1863年6月に至る間であるが（『資本論』第2卷に對するEngelsの序文參照），少くとも資本論全體の構成についてはそれ以後に腹案の記錄があり（1867年7月25日付の『資本論』第1卷第1版に對するMarxの序文），また資本の直接的生產過程を取扱う部分や「資本と利潤」を取扱う部分の構成に關する腹案は，この原稿の，しかも比較的に後の方の部分を書いていたころに書いたものであるから，このことは影響ないと見てよいと考えられる。

IV

一方では篇別構成について以上のような腹案があり，他方では利潤形態や生產價格が捨象されているとすれば，當然に他の要素は如何ということが考えられるわけであるが，事實，利潤以外にもなお種々の要素が捨象されている。

まず信用については，Marxは例えば次のように言っている。

——この個所は一般論に關する篇であって，信用に關する篇は別に設ける。そして利子付資本を分析したり，一般的利子率が一般的利潤率に照應するということを展開したりするのは，この一般論の篇ではなくて，信用に關する篇に讓る（11卷526頁）。

また，利子は時として剩餘價値の中からではなしに，勞働賃銀の中から支拂われることがある，このような場合それは勞働賃銀そのものからの控除を成すこともあるが，また利潤の特殊な形態を

構成することもあり，そしてこの最後の形態の利子は資本制生産が未發達である際に現われるのであるが，これについては「後で折にふれて見るであろう」と言われている（8巻168頁）。この「後で」が果してどこでであるかは明らかでないが，あるいはこれも信用に關する部分かも知れない。

競爭については曰く

——國民の平均的な群が消費資料の平均的數量を消費しえないということ，即ち彼らの消費が勞働の生産性に應當しては增大しないということ，このことから過剩生産が生ずるのである。この點に關する Ricardo の說明は一顧の價値もないものであるが，この全論題は，ここではなしに，諸資本の競爭という篇で取扱う（10 巻233頁）。

なお，生産に投ぜられるべき資本以外の資本が蓄積される場合，例えばそれが貨幣の形態において銀行業者の手もとに休息しているという場合や，また外國への貸付等々，一口に言えば放資投機，商人資本が個人的乃至産業的消費の增大に對する貯藏をすでに商品倉庫中に備えている場合の考察なども，競爭に關する部分へ讓られることになっていたのであった（10 巻271頁）。

さらに次のような言葉もある。

——實在的な恐慌はただ資本制生産の實在的な運動からのみ，換言すれば競爭および信用からのみ說明されうるものであるから，商品の形態變化に現われるところの潛在的な恐慌のより以上の發展を追跡することが，ここで問題となるわけであるが，ここではしかし潛在的恐慌のより以上の發展と言っても，その恐慌が資本の諸形態規定から生じてくる場合に限る云々（10 巻305頁）。

——私はここでは私の歷史的概觀から Sismondi を除外する，というのは，彼の見解の批判は，私がこの著書の後になって始めて取扱いうべき部分に，すなわち資本の現實的な運動（競爭及び信用）に屬するからである（11 巻 66 頁）。

要するに競爭や信用は捨象されているわけである。この捨象された競爭や信用が，『資本論』第3巻において取扱われることになるか，それとも，それ以後となるかは，明らかでないが，とにかくここでは後の個所に讓られることになっている。

V

利潤形態や競爭および信用以外にも，種々のものが，その考察を後に讓られている。

（1）——資本の再生産過程または流通過程に關する篇は後に設ける。不變資本の再生産に關する問題は明らかにこの篇において取扱うべき事がらである。もっともここで主要な問題を解決することは差支えないであろう（8 巻204頁）。

——流通過程における資本については，後で論及することにする。ここではまだただ生産的資本のみを，即ち直接的生産過程において使用される資本のみを問題とする（8 巻449頁）。

これを見ると，Marx は，『資本論』第2巻において取扱っている問題も——從ってそれに關する Smith, Ricardo 等の學說の批判も——『剰餘價値學說史』の後に讓っているように解される。

（2）——資本が商業資本として採るところの特別な形態は，後の個所で取扱うことにする。この資本によって使用される勞働者が如何なる範圍において生産的であり，または生産的でないかという問題は，この個所に至って始めて答えることができるものである（8 巻449頁）。

（3）——ある人が布を求め，裁縫職人を自宅に招いてこの布をズボンに仕立てさせる等の場合において，この勞務の價値が如何にして調節されるか，この價値自身が如何に勞働賃銀の法則によって規定されるかということは，ここで取扱っている問題に關する研究とは關係のないことであって，後の方の『勞働賃銀に關する章』に屬する問題である（8 巻441頁）。

（4）——資本制生産樣式の基礎の上では，ある勞働者が自分自身の生産手段を所有している場合には，たとえ彼が他の勞働者を雇傭するということがなくとも，これらの生産手段は資本と見做され，彼自身の勞働のうち，通常の勞働賃銀を形成する分量を超えて實現するところの部分は，彼の資本から生ずる利潤として現われる。この場合，この勞働者は，彼自身も色々な經濟上の身分に分けられ，彼は，自分自身の勞働者としてその賃銀を受取り，資本家として利潤を受取るとされるこ

とになるが，この記述は收入とその源泉と題する章に屬する（11 卷 478 頁に掲げられた斷片）。

（5）——資本をイギリスから追い出す危險に對する Hodgskin の駁論や，資本主義を產業に對する必要なる衝動とする見解に對する，また節約說に對する彼の駁論については，後に『俗流經濟學者に關する章』において述べる（11 卷 377 頁）。Bastiat との Proudhon の利子論爭は，俗流經濟學者が經濟學の諸範疇を擁護する遣り方の點においても，また皮相な社會主義（Proudhon の論爭は，殆んど斯かる名稱にも値いしないが）が右の諸範疇を攻擊する遣り方の點においても，ともに特徵的なものであるが（11 卷 572 頁），この論爭も，後に『俗流經濟學者たちに關する篇』において取扱う。

しかし單に『資本論』第 2 卷以後に取扱われている問題や，それに關する Smith, Ricardo 等々の學說が，このように後に讓られることになっているばかりではない。『剩餘價値學說史』を讀むと，『資本論』第 1 卷第 1 篇で取扱われている，商品や貨幣形態に關する問題や，これに關連する Smith 等の學說も，根本的には除外されているように思われる。そしてそれを暗示するような言葉もある。

——私は，既にこの著述の最初の部分において，商品の分析をなすに際して，如何に Adam Smith が交換價値の決定において動搖し，且つ特に商品の生產に必要なる勞働の分量によるその商品の價値の決定が，或る時は生ける勞働の一定量を買い得るところの商品の量，又は同じ事だが，商品の一定量が買われ得る生ける勞働の量と混同され，或る時はこれによって驅逐されているかを證據立てた（8 卷 153 頁）。

——この著述の最初の部分において見たように，商品が流通し得るためには，その交換價値はあらかじめ價格に轉化されねばならない。卽ち，貨幣に表現されねばならない（10 卷 48 頁）。

ここに「この著述の最初の部分」とあるのは，Marx がこの『剩餘價値學說史』の原稿を書いた時よりも 2 年乃至 4 年前に出版した『經濟學批判』のことであって，これらの言葉は，これらの問題はすでに『經濟學批判』で取扱ったところであるから，この『剩餘價値學說史』ではくり返さないという意味であると解釋される。從ってこれらの言葉は，『剩餘價値學說史』が單に後方ばかりではなしに，前方にも限界があることを示していると思われる。第 2 卷の Ricardo の項の終りには，周知のように一般的過剩生產は不可能であるとする Ricardo の獨斷を批判した有名な個所があるが，この個所の一部における叙述（10 卷 301 頁以下）には，この間の事情がはっきり現われていると思う。

VI

上の個所に紹介した Marx の言葉は，私には，次のような事柄を暗示していると思われる。すなわち，彼は『剩餘價値學說史』から，種々樣々な要素の考察を省いて，それを他の個所に讓るつもりであった。あるいは彼の理論的展開のうち『剩餘價値學說史』に對應し，それに先行するところの部分から，種々樣々な要素の考察を捨象し，從って『剩餘價値學說史』においてもその通りにするつもりであった。一方では，商品形態や貨幣形態の分析を，それ自身としては先行せる『經濟學批判』に讓り，他方では信用，競爭，利潤，資本の流通過程等，要するに『資本論』第 2 卷以後において問題とされている諸要素の考察を『剩餘價値學說史』以後の個所に讓るつもりであった。そして，『資本論』の構成を參照して言えば，第 1 卷第 2 篇から第 1 卷末までの個所において取扱われている諸規定だけを取扱うつもりであった。從って『剩餘價値學說史』において批判されているものも，Smith, Ricardo 等々の學說の全體ではなくて，この範圍の問題に關する學說に過ぎない——ということである。Marx は，先に引用したように，この中のある個所で「吾々はここではまだただ生產的資本のみを，卽ち直接的生產過程において使用される資本のみを取扱う」と言っているが（8 卷 449 頁），この言葉も，このような事情を指すものと思われる。

從って『剩餘價値學說史』は，前にも記したように，『資本論』全 3 卷につづき，Marx の經濟學史をおさめるという『資本論』第 4 卷ではないと

考えなければならないわけである。それは剰餘價値としての剰餘價値に關係する諸規定に關する Smith, Ricardo 等々の學說を批判し，『資本論』第1卷第2篇より第1卷末に至る範圍の理論的展開に對する『歷史的附錄』であって，位置からいえば，あたかも『經濟學批判』において商品の分析の後に『商品の分析に關する學說史』が置かれ，價値の尺度の分析の後および流通手段と貨幣の分析の後にそれぞれ『貨幣の尺度單位に關する學說史』および『流通手段および貨幣に關する學說史』があるように，『資本論』第1卷の末尾，第2卷の前に置かるべきものである。そして『剰餘價値學說史』という著書は，前にも記したように，このようなものであることを考えて讀まないと理解できなくなると思うのである。

勿論，私のこのような解釋に，種々樣々な疑問が伴うことは，私も自覺しないわけではない。Smith や Rcardo の項において，利潤形態の考察を後に讓ることになっているとしても，この『後』は私が考えるように『剰餘價價學說史』全體よりも後という意味ではなくて，その中の後の方の部分のことではないか。『剰餘價値學說史』の中には，利潤や地代や慌恐等々に關する Marx 自身の理論のかなり詳細な展開や，これらの問題に關する Smith, Ricardo 等々の學說の詳細な批判がなされており，私は，これらを，利潤，地代等そのものの分析ではなく，また Smith, Ricardo 等の利潤論，地代論そのものの批判ではなくて，ある特定の觀點からするそれらのものの分析と批判とであって，その特定の觀點は『剰餘價値』に關する學說史として當然に言及しなければならないものと解釋しているのであるが，このように解釋してよいかどうか。經濟學の篇別の腹案も最後的決定的なものとは言えず，それとの關連にも未解決のものがある等，數えてみれば幾つもあり，これらのことを考えると，私も私の解釋を終極的に立證されたものとは考えず，最後の解決は論理的な途を辿って與えらるべきだとは思うのであるが，なお私は以上の解釋を棄て兼ねているのである。

(昭和 30. 4. 15)